

佐久の先人たち⑤

ドイツ語学者の学習院長

さくら いわ いち
桜井和市

(1902~1986年)



戦後、一般にも開放された学習院で、院長に選ばれたドイツ語教授。戦時中の“海軍院長”、戦後の“一高院長”の後をうけ、新時代にこたえた“国際人院長”だ。

二人の絆はそれだけではなかった。小西はこのあと学習院女子短期大学次長に迎えられ、桜井とともに四年制の学習院女子大学昇格への道筋をつくった。桜井はドイツ語学者。そのきっかけは松高入学のさいの、外国語選択にあった。「英語は中学でみっちりやった。これからはドイツ語だ」と、迷うことなく第一外国語にドイツ語を選んだ。

東大でも在学中から「ドイツ語の桜井」の声望は高かった。その卒業を待って、当時の松高校長は、「ぜひ母校のドイツ語教師に」と、東大に申し入れた。勿論東大でも大賛成。早速これを本人に伝えようと、「松高はどうも」と言いつつ断った。桜井の話によると、その理由は「遅れて入った中学時代の同級生がまだ松高にいる。とても教壇に立てない」という。

それではと、次に指名されたのが静岡高等学校(現静岡大学、以下「静岡」と略称)で、ここに二年間勤めた。一九三七(昭和12年)年、文部省の在外研究員として一年間、ドイツに派遣され、帰国するとすぐ、学習院教授となった。

ラジオでドイツ語講座

学習院は、一八七七(明治10)年、皇族と華族、特に許された官界・財界の子弟のために、東京に設けられた教育機関で、終戦まで宮内省(現宮内庁)が管理していた。男女別々の学習院があり、初等・



国際人院長の期待を受けて学習院長に就任の桜井
学校法人学習院提供

中等科のほか、男子学習院には旧制高校と同クラスの高等科があった。

桜井が初めて教壇に立った頃、生徒の中には三島由紀夫(本名平岡公威)がいた。院内では一番の人氣者で成績も抜群、級長も務め、すでに文芸雑誌などには「三島」のペンネームで創作を発表していたほどだった。だが身体は薄弱で、教練のときなどは、三八式銃が肩に重そうで痛々しかった。

戦後学習院は、宮内省からの管理を離れ、私立学校に衣がえし、広く一般にも門戸が開放された。高等科が母体となって、一九四九年には、学習院大学が発足した。院長は戦時中、海軍きつての良識派の声が高かった野村吉三郎・山梨勝之進(いずれも海軍大将)、戦後は旧制第一高等学校長・文部大臣を務めた安倍能成が就任、全国の国公立を通じて第

松高合格、二人の絆

桜井和市は、南佐久郡岸野村(現佐久市)の生まれ。一九一九(大正8)年、開校したばかりの松本高等学校(現信州大学、以下「松高」と略称)に、第一回生として入学した。この年、野沢中学(現野沢北高校)から合格したのは桜井と小西謙(岩村田出身)の二人で、ともに松高から東京帝国大学に進んだ。戦後、小西は初代の長野県教育長として六三制の県内教育制度を完成させた。

一級の充実した大学となった。

米軍の占領も終わり、講和会議によって日本も国際社会に復帰すると、NHKのラジオから「ドイツ語講座」が流れた。これは終戦直後の人気番組「カムカム英語」にならったもので、次はドイツ語だと開始された。講師は桜井で、当時は「外国語なら

何でも」という風潮が高い時代だけに、爆発的な人氣をはくした。とくに若い人たちが歓迎された。

三代の天皇が一家迎え

桜井は、一九七〇(昭和45)年、麻生磯次院長(最後の一高校長)のあとを受けて学習院長に就任した。任期は三年で、四期二年にわたって院長を務めた。その間の最大行事は、学習院の創立百周年の記念行事で、院長の仕事はまず、寄付金集めだった。

普通の学校と違って、ことは学習院、その目標額も五〇億円に達した。百年記念事業委員会は一九七三年、発足したが、その直後の石油ショックにより経済が混乱し、期待していた財界も模様なぐめの姿勢となった。このとき、強力な協力者が現われた。松高時代の同窓生、堀田庄三住友銀行会長と、静高時代の教え子、小山五郎三井銀行会長である。堀田は桜井を連れて松下電器の創業者松下幸之助などに当たり、小山は銀行協会をまとめ、多額の寄付の根回しをしてくれた。

記念式典は一九七八(昭和53)年一〇月一八日、この日、天皇(昭和天皇)、皇后両陛下をはじめ、皇太子(今上天皇)ご夫妻、学習院大学に在学中の徳仁親王(現皇太子)はオーケストラの団員としてご列席した。皇室二代が公の場所に「同席は初めてのことだった。

昭和天皇から「これを機に関係者一同は気持ちを新たに、学園が長い歴史と伝統の上に立って、さらに進展を加え、その使命を達成するよう努力することを望んでやみません」との言葉を賜わった。桜井にとっては終世忘れられぬ感激であり、「全く一期一会の行事であった」としている。

一九八一年八月、桜井は四期目の任期満了を機に院長を退任した。その後は一五年ほど前から手がけていたオト・ベハーゲルの著書を、『ドイツ語学概論』として翻訳完成に当たった。メンバーは八人で、大学を出たばかりの若かった者も、一五年の歳月は重く、いずれも大学教授となっていた。この本は一九八二年二月に完成した。桜井にとってはこれが最後の仕事となり、一九八六年一月二二日、八三歳で死去した。

(中村勝実)

参考文献

長野県野沢北高等学校記念誌編集委員会編

『高原の日は輝けり 野沢中・北高史』一九八八



学習院創立一〇〇周年記念式にご臨席の天皇・皇后両陛下に開会の挨拶をする学習院長の桜井

学校法人学習院提供